

## 学生ボランティアに対する派遣校教師の評価

山本 真由美<sup>\*1</sup> 瀬部 あゆみ<sup>\*2</sup> 島 治伸<sup>\*3</sup>

The estimates of dispatched elementary schools and junior high schools teachers  
to student volunteers

Mayumi YAMAMOTO<sup>\*1</sup> Ayumi SEBE<sup>\*2</sup> Harunobu SHIMA<sup>\*3</sup>

### Abstract

As a part of the special needs education, there is a cooperative action with the Education Committee of Tokushima on the project of dispatching student volunteers to the elementary and junior high schools for learning support.

In order to know the desires and expectations of the teachers of those schools who sent students volunteers, a questionnaire survey was made.

98 % of the student volunteers were recognized in elementary schools and 100% within junior high schools. The results of the survey show four items in which the elementary and junior high schools coincide. They are as follows : "Individual support to the pupils with difficulties in learning", "support to the pupils who could not concentrate in the class nor in the study", "appropriate support to the pupils when they need guidance", "tell the teacher the situation of pupils". More specifically, as the individual differences among pupils grow wider, guidance for everyone becomes difficult. Moreover, because the expectations of this support for the students must be achieved within a limited span of time, some people believe that only some support can be realized but not all.

Although the existence of students volunteers is known by the teachers, there are differences among the teachers as to which type of support can be expected from the students. Therefore, from now on, it becomes necessary to consider which type of support the students have to give.

Key words : Special needs education, student volunteers, individual support

---

\*1 徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

\*2 石原金属株式会社 Ishihara Metal Co.,Ltd

\*3 徳島文理大学人間生活学部 Tokushima Bunri University Human Life Sciences

## はじめに

2001年10月に「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」が設置され、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する実態調査」の結果、2003年3月に学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、高機能自閉症、学習や生活面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒が6.3%程度の割合で通常の学級に在籍している可能性が報告された。

さらに、さまざまな議論がなされ、2005年12月に「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)」が取りまとめられた。それらに基づき、2006年3月に「学校教育法施行規則」の一部改正が、2006年6月に「学校教育法」等の一部改正が行われ、障害のある子どもの一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導や必要な支援を行うものである特別支援教育が2007年4月から全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等において本格的に実施されることとなった。

日本で2007年度から本格実施されるようになった特別支援教育であるが、これは1994年にサラマンカで採択されたインクルーシブ教育の理念に基づいている。インクルーシブ教育とは通常学級の中で個々の幼児・児童・生徒のニーズに応じた教育を行うことである。しかし、40人/1学級を標準としている日本の学校で

は、この理念を実現するのは困難である。学校現場における人材不足を補うために、文部科学省と各自治体ではさまざまな人材を学校現場に派遣する施策を実施している。文部科学省の「特別支援教育支援員」の活用事業に基づき、各自治体によって名称はさまざまであるが、学校生活支援教員、スクールアシスタント(兵庫県教育委員会、2006)、総合育成支援員(京都市教育委員会、2008)、特別支援教育助教員、学校支援助教員(徳島市教育委員会、2008)、学生ボランティアなどがある。また、特別支援教育に関わる事業以外に理科教育支援員(独立行政法人科学技術振興機構、2008)などもあり、1つの学校に教員以外の人材が複数配置されている。

学校現場に特別支援教育への支援を目的に学生をボランティアとして最初に活用を開始したのが神戸市教育委員会である(神戸市小学校長会、2004)。この学生ボランティアは、1996年の中教審「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」で登場した学校ボランティア(1997年には「学校支援ボランティア」と連続する活動と言える。学校支援ボランティアは、地域住民がもの作り指導や伝統芸能演示、教材作成の協力、施設設備の補修や植木の剪定、学校内外のパトロールなど幅広い環境支援と学習支援を行っている。徳島県では通常の学級に在籍する発達障害などで特別

な支援を必要とする児童生徒一人一人の特性に応じた指導支援の充実を図ることを目的に、県内4大学と連携し、大学生・大学院生を小学校・中学校に「学生支援員」として派遣し、学級担任等の補助として平成18年10月から生活や学習の支援を行っている。徳島市では平成17年度から徳島市特別支援教育連携協議会を設置し、関係機関との連携による支援体制の整備を目指し、「学習支援ボランティア」という名目で徳島市内の小学校・中学校に大学生・大学院生を派遣している。「学生支援員」や「学習支援ボランティア」（以下、学生ボランティア）の支援対象は、通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒、及びその特性のある児童生徒を中心に、支援を必要とする全ての児童生徒であり、特別支援教育コーディネーターや学級担任等の指導のもと、学習や生活の指導支援を補助するというのが支援内容である。派遣対象校は通常の学級に発達障害などの特別な支援を必要とする児童生徒が在籍し、かつ徳島市の特別支援教育に関する調査研究及び学生の大学における研究に協力できる学校とされている。活動時間は週に1回、午前または午後4時間程度で、具体的な時間は各学校と個人で打ち合わせをして決めている。徳島市では今年度、この制度開始から5年目を迎えている。

学生ボランティアは、主に保育、教育、臨床心理などに関わって勉学

を重ねている大学生、大学院生（以下、学生）が対象となっている。学生ボランティアは、先に述べたさまざまな支援員の一環であり、学校現場において特別支援教育コーディネーターや学級担任の補助的役割、通常の学級において支援を必要とする児童生徒から見れば学習や学校生活の指導支援を行ってくれる役割を担うことになる。若干の交通費とボランティア保険への加入の保障はあるもののあくまでもボランティアであるこの活動は、学生にとっても意義のある活動となるべきものであり、社会的自立、職業的自立に役立つ活動になる必要がある。

そこで、本研究は、現在学校現場にさまざまな名称で派遣されている特別支援教育支援員の一環と考えられる学生ボランティアの存在が小学校・中学校の教師にどの程度知られているのか、学生がボランティアとして小学校・中学校に入る中で、どのような活動を期待されているのかやどのようなニーズがあるのかを調べるために、学生ボランティアが派遣されている小学校と中学校の教師を対象として意識調査することを目的とした。

## 方 法

(1) 協力者：徳島市内にある小学校・中学校のうち、学生ボランティアが派遣された小学校23校、中学校10校に勤務する教師1,170名が対象となった。回収率は小学校55.4%、中

学校 48.9%，全体で 52.8%であった。内訳は Table 1 に示す通りである。

Table 1. 協力者の男女別校種別人数内訳 (%)

校種 \ 性別	男性 (%)	女性 (%)	合計 (%)
小学校	103 (29.4)	247 (70.6)	350 (100)
中学校	81 (43.1)	107 (56.9)	188 (100)

(2) 調査実施期間：2008年6月下旬から7月上旬であった。

(3) 調査方法：質問紙法

質問紙の内容は、学生ボランティアを派遣している4大学(徳島大学・鳴門教育大学・徳島文理大学・四国大学)の学生派遣責任者が協力して作成した。それを徳島市教育委員会(以下、市教委)の責任者が修正の上、承認した。市教委の担当指導主事が小学校と中学校の校長会で質問紙調査についての説明を行い、協力を依頼した。その後、学校毎に教員数分を印刷して、封筒に入れ、市教委からその封筒を配布した。配布2週間後に市教委が質問紙を回収し、それを著者らが受け取った。

(4) 質問紙の構成：大きく4つの質問内容で構成された(附表参照)。

A：学習支援ボランティアの存在についての1項目。「あなたは学習支援ボランティアとして大学(院)生があなたの学校に来ていることをご存

じですか？」であった。

B：学習支援ボランティアの活動への期待についての11項目であった。

C：学生への要望についての12項目であった。

D：教師自身のことについての8項目であった。

A～Cでは、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3件法で回答を求めた。Dではあてはまるものすべてに○印をつけてもらった。加えて、Bでは具体的な内容を記述するための自由記述欄を設けた。

## 結果

(1) 学生ボランティアの認識度

校種別のボランティアの認識率は Table 2 に示す通りである。学生ボランティアの存在は各学校に定着していると言える。

学校におけるボランティアとの関わりは Table 3 に示す通りである。ボランティアの存在は知っていても、実際に関わりがあるのは、小学校・中学校共に半数である。

Table 2. 校種別人数内訳 (%)

校種 \ 有無		知っている	知らない	合計
		人数 (%)	人数 (%)	
小学校	人数 (%)	343 (98.0)	7 (2.0)	350 (100)
中学校	人数 (%)	188 (100)	0 (0)	188 (100)

Table 3. 校種別人数内訳 (%)

校種		有無	ある	ない	合計
小学校	人数 (%)		174 (49.7)	176 (50.3)	350 (100)
中学校	人数 (%)		86 (45.7)	102 (54.3)	188 (100)

(2) 校種別学生ボランティアに期待する活動

校種別に Table 4 に示す項目についてどの程度期待するかを検討した。質問のうち、11 番目「その他」を除く項目を「はい」2点、「どちらでもない」1点、「いいえ」0点で評定し、校種別に分散分析を実施した。結果

は Table 4 に示す通りである。

校種に有意差がみられなかったのは、「学習につまずきのある子どもへの個別支援」、「授業中、学習に集中できない子どもへの支援」、「一斉指導の時、支援の必要な子どもへの適切な支援」、「子どもの様子を伝える」の4項目であった。

Table 4 校種別学生ボランティアに期待する活動の分散分析表

校種	小学校 平均 (SD)	中学校 平均 (SD)	F 値	df	有意 確率
学習につまずきのある子どもへの個別支援	1.90 (0.340)	1.94 (0.285)	1.978	1,536	n.s.
授業中に離席する子どもへの支援	1.80 (0.467)	1.56 (0.762)	23.841		p=0.000
授業中に教室を出てしまう子どもへの支援	1.68 (0.629)	1.31 (0.782)	16.339		p=0.000
授業中、学習に集中できない子どもへの支援	1.84 (0.427)	1.81 (0.429)	0.363		n.s.
一斉指導の時、支援の必要な子どもへの適切な支援	1.88 (0.372)	1.82 (0.446)	2.617		n.s.
給食指導中の支援	1.34 (0.715)	0.94 (0.802)	19.423		p=0.000
清掃活動中の支援	1.45 (0.695)	1.15 (0.816)	11.010		p=0.000
休憩時間での遊びや友人関係への支援	1.50 (0.689)	1.07 (0.816)	44.875		p=0.000
パニックなど興奮状態にいる子どもをクールダウンさせるなどの支援	1.43 (0.718)	1.20 (0.735)	6.569		p=0.000
子どもの様子を教師に伝える	1.87 (0.395)	1.84 (0.400)	1.193		n.s.

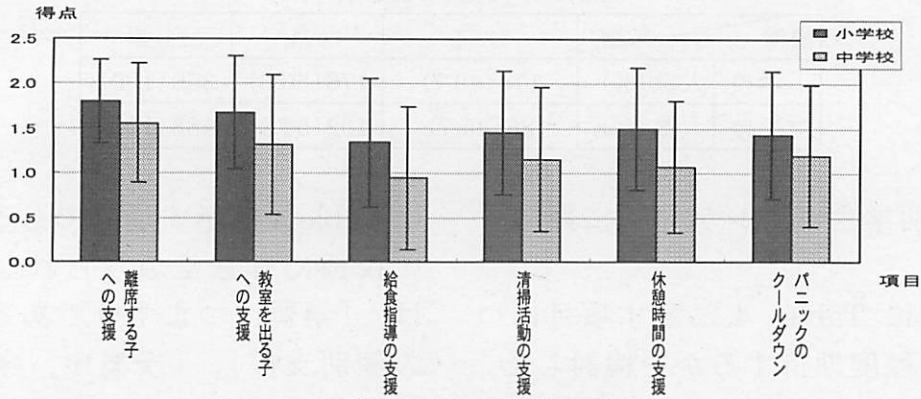


Figure 1 校種で差のあった期待する項目

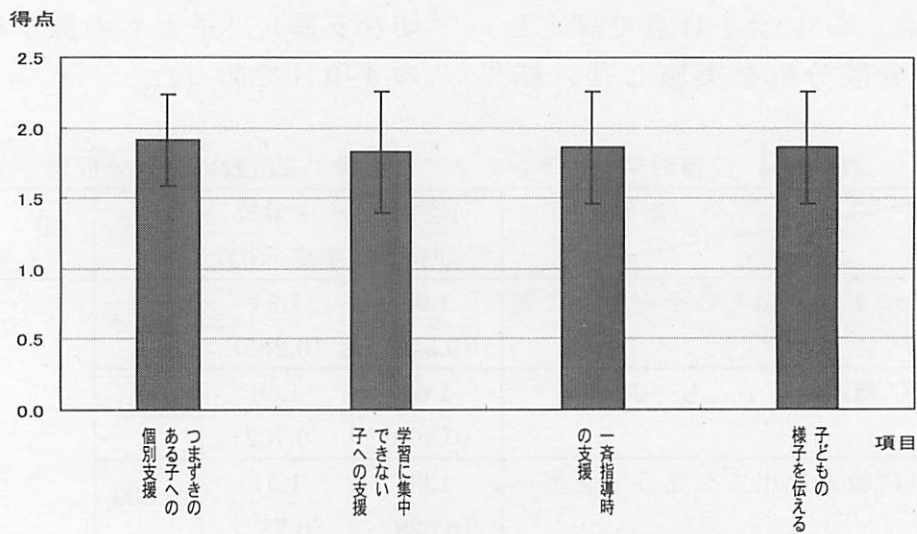


Figure 2 校種で差のなかった期待する項目

校種によって有意差がみられたのは、「授業中に離席する子どもへの支援」、「授業中に教室を出てしまう子どもへの支援」、「給食指導中の支援」、「清掃活動中の支援」、「休憩時間の遊びや友人関係への支援」、「パニックなど興奮状態にいる子どもをクールダウンさせるなどの支援」の6項目であった。

校種間で差のあった項目について、校種別に平均値と標準偏差を図示し

たのが、Fig. 1 である。いずれも中学校の方が、小学校よりも期待が低くなっていた。校種間で差の見られなかった項目の平均値と標準偏差を図示したのが、Fig. 2 である。

学生ボランティアに期待する項目各質問には自由記述欄を設けた。それぞれの質問の校種別自由記述回答人数と割合は Table 5 に示す通りである。各項目について、約 10～30% の自由記述回答があった。

Table 5 校種別自由記述回答数 (%)

項 目	小学校	中学校
学習につまずきのある子どもへの個別支援	87(24.9)	57(30.3)
授業中に離席する子どもへの支援	73(20.9)	49(26.1)
授業中に教室を出てしまう子どもへの支援	72(20.6)	50(26.6)
授業中、学習に集中できない子どもへの支援	56(16.0)	43(22.9)
一斉指導の時、支援の必要な子どもへの適切な支援	66(18.9)	37(19.7)
給食指導中の支援	58(16.6)	21(11.2)
清掃活動中の支援	59(16.9)	29(15.4)
休憩時間での遊びや友人関係への支援	69(19.7)	26(13.8)
パニックなど興奮状態にいる子どもをクールダウンさせるなどの支援	86(24.6)	34(18.1)
学習支援ボランティアの目から見た子どもの様子を担任教師に伝えること	74(21.1)	35(18.6)

Table 6 学習につまずきのある子どもへの個別支援の校種別回答別自由記述回答数と例

小学校	はい(82) ・声掛けを多くしてもらえば集中しやすくなる。 ・基本的なつまずきを補ってくれたら助かる。	どちらでもない(5) ・個別指導は担任がある程度できる。 ・週1回で子どもがなじめるのか気がかりだ。	いいえ(0)
	はい(56) ・個別にわかりやすく解説補足してほしい。 ・ノート記録の確認と補助。	どちらでもない(1) ・支援が必要と指定されている生徒以外にも広く支援をしてもよいのではないか。	

Table 7 授業中、学習に集中できない子どもへの支援の校種別回答別自由記述回答数と例

小学校	はい(52) ・ボランティア学生の一言で集中が戻る時もあるの。 ・横についていただければ集中しやすい。	どちらでもない(4) ・そういう子も含めて授業が成立するように努力しているので、対応は担任が工夫するべき。 ・集中出来ない子どもは多いので、タイミングをつかむのは難しいから。	いいえ(0)
	はい(40) ・声掛けやつまずきへの支援 ・教科書を開けるなどの授業準備をさせて欲しい。	どちらでもない(3) ・素直に指導が入っていく生徒に対しての支援は可能だが・・・。 ・どうして集中出来ないのか理由が分かれば支援してほしいが、原因がわからなければ、効果は期待できない。	

Table 8 一斉指導の時、支援の必要な子どもへの適切な支援の校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(60)	どちらでもない(4)	いいえ(2)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒントを与えるなど個別に対応できる利点を活かして向き合ってもらえると助かる。</li> <li>・一斉指導時に個別指導の時間がなかなか取れない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対応が難しいから。</li> <li>・指導の意図をどこまで把握できているかが疑問。</li> <li>・TTで入ってもらえれば。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別支援が必要かどうかの判断は、一斉指導時に学生ボランティアには難しい。</li> <li>・担任の仕事だと思う。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指示について行けない子、理解出来ていない子への支援をお願いしたい。</li> <li>・板書が苦手な生徒への支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どちらでもない(1)</li> <li>・ボランティア学生が入ることが、プラスに働くか、マイナスに働くかがわからない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いいえ(2)</li> <li>・教室内にいれば、何とか授業の方法もあるから。</li> <li>・特別な場合を除き、区別がつきにくい。</li> </ul>

Table 9 学生ボランティアの目から見た子どもの様子を担任教師に伝えることの校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(73)	どちらでもない(1)	いいえ(0)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・違った新鮮な目で見た意見をいただくと指導のよりよい手立てが見つかるかも知れない。</li> <li>・お互いに情報交換することでよりよい指導につながると思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どちらでもない(1)</li> <li>・感じたことを文面化し、コーディネーターが中を取って伝えの方が良い場合もある。</li> </ul>	
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい(35)</li> <li>・いろいろな角度から生徒を理解したい。</li> <li>・自分の教科以外の様子が分かりにくいのでできれば生徒の様子を知らせてほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どちらでもない(0)</li> </ul>	

Table 5 の自由記述をさらに「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」別に分類し、校種別にそれぞれの回答例を記した。校種で差のなかった期待する4項目についての自由記述を Table 6 から Table 9 に示した。4

項目はいずれも「はい」と回答した割合が 91～100%となっており、現在学生ボランティアが行っている活動、期待する具体的支援内容、予想される効果、教師の現状、児童生徒の現状、期待する項目内容の限界な



どに分類できた。小学校と中学校で差のあった項目は6項目であった (Table10 ~ 15)。いずれも中学校の方が小学校に比べて、期待する程度は低かった。自由記述の内容は、具体的支援、期待する支援、支援によってもたらされる学生ボランティアによってよい面、限界などに分類

できる。「授業中の離席」は、中学校ではあまり見られない。また、小学校では、当該児童の安全確保のための支援という期待が多いが、中学校では、生徒指導上の問題と捉えており、学生ボランティアの支援は難しいと判断している。

Table 10 授業中に離席する子どもへの支援の校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(61)	どちらでもない(10)	いいえ(2)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>安全確保の面からありがたい。</li> <li>そばに寄り添うことで落ち着いて学習に取り組めるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>離席する子はいない。</li> <li>発達障害児の場合、常時関わりのある教師の方が支援しやすいかもしれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達障害児の場合、専門家が支援すべきで、ボランティアではできない。</li> <li>担任の方が安定することが多く、早い。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>声掛けを行って欲しい。</li> <li>教師とは違う立場で理由を聞いてほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア学生が来ることが良い方向に働くか、悪い方向に働くのかはわからない。</li> <li>今はない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>該当者はいない。</li> <li>生徒に対する十分な理解がなければ、逆効果になる可能性がある。</li> </ul>

Table 11 授業中に教室を出てしまう子どもへの支援の校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(62)	どちらでもない(7)	いいえ(3)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の安全面、他児の管理補助をして欲しい。</li> <li>支援する児の特徴を事前に聞いて、担任と同じ方向性で接して欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実態をつかみ切れていないから指導は難しいだろう。</li> <li>子どもによってはそれでストレスを緩和することができ、次の学習にスムーズに入れる場合がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>その対応は担任がしたいから。</li> <li>担当が他に配置されている。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任だけでは対応しきれないので、追いかけて個別に支援して欲しい。</li> <li>授業者以外の教師へ連絡をしてほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業者にとって有難いが、生徒指導上、無理は要求できない。</li> <li>支援できるだけの余裕があればという条件付き。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>信頼関係があれば大丈夫だと思いますが、なければ支援は難しいと思う。</li> <li>生徒指導上の問題だから。</li> </ul>

Table 12 給食指導中の支援の校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(38)	どちらでもない(17)	いいえ(3)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生面, 安全面を見てほしい。</li> <li>・準備, 片付けの補助</li> <li>・楽しく食事をするためのマナーを指導してほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達と楽しく給食を食べてほしい。</li> <li>・時間外なので出来る範囲でよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・給食には入っていない。</li> <li>・支援を必要とすることが少ない。</li> <li>・児童と楽しく食べてくれるだけでよい。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短時間で準備, 後片付けが必要なので, 見守り, 声掛けをお願いしたい。</li> <li>・人間的なふれあいやつながりができる大切な時間。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任の指導下における支援であればお願いしたい。</li> <li>・ボランティア学生に少しでも経験してもらうために生徒達と一緒に食べてもらっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活全てに関わることは生徒とのつながりもでき, 学習支援もやりやすくなるだろうが, 時間制限もあるので, 授業中心に行うのがよい。</li> </ul>

Table 13 清掃活動中の支援の校種別回答別自由記述回答数と例

	はい(47)	どちらでもない(10)	いいえ(2)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目の行き届かない場所に支援に行ってくださいと助かる。</li> <li>・声掛けと共に掃除する姿を見て, 掃除の意義を学べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間外なので出来る範囲でよい。</li> <li>・ゆとりができてからでよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入っていない。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に掃除をして掃除の姿を教してほしい。</li> <li>・何箇所か分担箇所があり, 一人では見るできないため。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そこまでお願いして良いのか。</li> <li>・現在は午前中のみで, 授業終了後の清掃時間である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入っていない。</li> <li>・午前中の勤務である。</li> </ul>

「給食指導」と「清掃指導」は, 学生ボランティアの活動時間帯の関係で入っていないことが多い。「休憩時間での遊びや友人関係への支援」について小学校では, 教師年齢が高くなっているの, 若い学生ボランティアと一緒に遊んでほしい, 遊ぶことで児童理解に繋がるという回答がある。中学校では, 生徒と関わることで信頼関係が深まると考えている

が, 学生ボランティアの活動時間帯を考慮し, 授業への支援を希望しているようである。「パニックなど興奮状態にいる子どもをクールダウンさせるなどの支援」は「はい」という回答率が期待する支援項目の中で最も低い。小学校・中学校共に危険であるとか, 荷が重いなどの回答が複数見られた。

Table 14 休憩時間での遊びや友人関係への支援の校種別回答別

自由記述回答数と例

	はい(62)	どちらでもない(6)	いいえ(1)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援計画でソーシャルスキルトレーニングの1つとして外で友達と遊ぶという目当てを持っている児童がいるので。</li> <li>・教師の目が行き届かないところを見て欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任だけで十分にできることが多い。でも担任一人で出来ない時もある。</li> <li>・支援の必要な児童がどのような時かによって変わるので。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事故が起きた時、責任を負えないから。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢が近い分、気持ち的理解できる。</li> <li>・生徒達もお兄さん、お姉さん感覚で休み時間は気軽に声を掛けている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒との年齢が近いこともあり、教員には見せない姿を見せることがある。気づいたことは学級担任等に知らせてもらう。</li> <li>・友人関係等は急に把握するのは難しく、配慮が欠かせない生徒もいるから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に対する十分な理解がなくては支援が逆効果になる可能性があるため、慎重な対応をお願いしたい。</li> <li>・時間制限もあるので、授業中心に行うのがよい。</li> </ul>

Table 15 パニックなど興奮状態にいる子どもをクールダウンさせるなどの支援の校種別回答別

自由記述回答数と例

	はい(57)	どちらでもない(20)	いいえ(9)
小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そばにいて話を聞いてあげると落ち着くのではないか。</li> <li>・クールダウンさせるのは担任がして、他の児童の管理をして欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パニックなどの興奮状態になっている子はボランティア学生にとって荷が重いのではないか。専門的知識があって適切な対応ができるのであればお願いしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事故が起きた時に責任を負えないから。</li> <li>・一人一人の個人特性がわからないと難しいと思う。</li> </ul>
中学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に別の場所でクールダウンしたら、そうなった理由を聞いてやってほしい。</li> <li>・寄り添うことでクールダウンになることもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時と場合によって難しいと思うので、ボランティア学生の仕事ではないと思う。</li> <li>・基本的には教員が対応する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の性格等を知っていなければ危険である。</li> <li>・なかなかそこまでの関係は作れない。</li> </ul>

